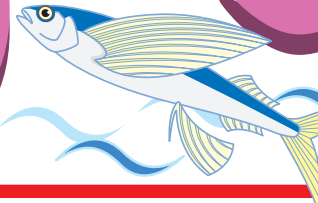


へいじろ

HEIJIRŌ



2023 春
令和5年3月23日

号外

〜受賞に際して〜 田上寛容

私は、日常の診療の中で、あるおばあちゃんと出会いました。そのおばあちゃんと長く接する中で、とても心に残る物語が生まれましたので、是非皆さんにお伝えしたいと思い、今回のコンテストに応募しました。まさか、このような素晴らしい賞をいただけるとは望外の喜びですが、私にとって最も嬉しいことはこの物語を全国の方に読んでもらうことで、種子島ならではの医療を広く知っていただくことができたといいことです。

田上寛容理事長が 読売新聞社賞を受賞！



私は、医師として病気を診るのは最も大事なことでと思いますが、相手は病気を持った患者さんであるということも忘れてはならないと常に思っています。患者さんには、それぞれの人生があり、さまざまな思いがあります。これからも患者さんとの距離の近さを大切にしつつ、皆さんの思いに寄り添った種子島ならではの医療を提供していきたいと思えます。

最後に、この物語の中では、私とおばあちゃんしか出てきませんが、おばあちゃんとの関わりの中には私だけではなく、おばあちゃんのご家族や多くの病院職員も含まれています。

種子島ならではの医療とは、『患者さんとの距離の近さ』だと思っと思っています。病院に来られるだけでも大変な中で、種子島の皆さんは、いつも気さくに、そして温かく接してくれま

皆さんには本当に感謝したいと思っしています。そして、もう一言言わせてください。「おばあちゃん、ありがとう。」

今回の受賞に際して、

“読売新聞社賞” 受賞作品

～ 干支のぬいぐるみ ～

そのおばあちゃんのかかりつけ医になつたのは、十年以上も前からでした。通院を重ねるごとに仲良くなり、いつの頃からか、診察の時には病氣そっちのけで親しく世間話をするようになりました。毛糸で編んだ動物のぬいぐるみを作るのが得意なおばあちゃん、毎年、年明けの診察には、その年の干支のぬいぐるみを作って持って来てくれるようになりました。

最初の頃は、「いつまで続けられるのかねえ。」などと言いながらでしたが、ネズミから始まった干支のぬいぐるみは、毎年ひとつずつ増えていきました。でも、それに伴いおばあちゃんも年を取ります。とても元気だったおばあちゃんも、だんだん手がかなわなくなり、目も見えなくなつてきて、「もうダメだよ。来年は作れないよ。」と嘆くようになりましたが、それでも欠かさず年明けには、ぬいぐるみを作って来てくれました。

そのうち、自分では病院まで通うことが出来なくなり、訪問診療で自宅に伺うようになりました。往診に行く、いつもとても喜んでくれて、色々な昔話をしてくれました。高校生の頃は毎朝暗いうちから何キロも歩いて街の学校に通ったこと。若い頃満州に渡り、看護師として働いたこと。満州での仕事はとても大変だったけれど、恩賜の銀時計をもらって嬉しかったこと。島に帰ってきてからは数少ない助産師として島内を駆け回ったこと。

でも、話を聞いて一番驚いたのは、実は私がまだヨチヨチ歩きだった頃から知っていて、私の子守りをしてくれていたことでした。



その後、何度か具合が悪くなって、入退院を繰り返して、さすがのおばあちゃんもすっかり体力が落ちてきました。百一歳の誕生日を迎える年明けには、寝ていることが多くなり、もうぬいぐるみを作るのは無理だと感じていましたが、なんと、作ってくれたのです。それはそれはかわいいイヌのぬいぐるみでした。

「あと1個で十二支全部揃うね。」

「来年までお願いね！」

励ましながら話をしていました。寄る年波には勝てずに、その年の冬、百一歳で天国へ旅立ちました。

年が明け、病院で診察をしていると、受付から面会の方が来ていると連絡がありました。名前を聞くとそのおばあちゃんの名前を名乗っているとのことでした。びっくりして会いに行くと、そのおばあちゃんの友達という方でした。そして、その方が下げていた袋の中には、とてもかわいいイノシシのぬいぐるみが入っていました。年が明けたら私に渡して欲しいとのことづかっていたとのことでした。おばあちゃんは、自分がそう長くはないことを分かっていて、前もって、最後のぬいぐるみを準備してくれていたのだと思います。

「これで十二支全部揃ったよ。」

「確かに受け取ったからね。」

「有難う。おばあちゃん。」

「ゆっくり休んでね。」



十二支のぬいぐるみ

田上さんに読売新聞社賞

保管されている
干支のぬいぐるみ

生命を見つめるフォト&エッセー



第6回「生命（いのち）を見つめるフォト&エッセー」（読売新聞社、日本医師会主催、厚生労働省、文部科学省後援、東京海上日動、東京海上日動あんしん生命協賛）の入賞者が決まった。県内からはエッセー部門一般の部で、西之表市西之表の医師、田上寛容さん（53）が読売新聞社賞に選ばれた。

西之表の医師 患者への感謝つづる



田上寛容さん

タイトルは「干支のぬいぐるみ」。干支にちなんだ手作りのぬいぐるみを毎年贈ってくれた患者への感謝の気持ちをこめてつけた。

田上さんは北九州市や鹿児島市で医師として働き、35歳から西之表市内に住む。かかりつけ医として長年診察していた高齢の女性患者と仲良くなり、毎年ぬいぐるみをもらうように。ネズミ、牛、トラと毎年増え、診察室に飾った。

女性は体力がなくなり、寝ていることが多くなっても製作を続けた。田上さんは、犬のぬいぐるみをもらった時に「あと1個で十二支全部そろうね。来年までお願いね」と伝えただが、新年を迎える前に10歳で亡くなった。

願いがかなわなかったと思っていたところ、年が明けた2019年、女性の友人が病院を訪れ、イノシシのぬいぐるみを渡してくれた。

田上さんはエッセーに「おばあちゃんは、自分がそう長くない事を分かっている、前もって、最後のぬいぐるみを準備してくれていたのだと思います」と記し、「確かに受け取ったからね」「ゆっくり休んでね」などと感謝をしたためた。ぬいぐるみは汚れないよ

うに大切に保管している。『おばあちゃんのおかげだよ』と受賞関係において、生活や精神を支える大切さを改めて気づかされた。『おばあちゃんのおかげだよ』と受賞を知らせに墓参りに行きたい』と語った。

